

千葉県成田市三里塚周辺地域の

社会的・文化的特性に関する実証的研究

房総の歴史と下総台地の開拓：メコンデルタ開拓との比較から（1）

高田 洋子

はじめに

この共同研究に参加した筆者のそもそもの意図は、本学の未来図を描く一つの方法として、本学が立地する千葉県、佐倉・成田両市周辺の歴史過程や文化的特性に関する理解を深める必要性を感じたこと、言い換えるなら、本学が真に当該地域に根を張り、コミュニティーとの関係性を強めて地域で共生するためには、当該地域の歴史環境および固有の社会的特性を踏まえておくことが大切ではないかと考えたからである。

地域の歴史的固有性の探求には、複数のアプローチがあるだろう。筆者は、これまでベトナム領メコンデルタのフランス植民地期における開拓史に取り組んできたことから、千葉県内の諸地域が、明治期以来、官有地の払下げと開墾、入植を経験した土地であることに興味を覚えた。ほぼ同じ時期に、メコンデルタの広大な浸水地帯でも、植民地政府による開発基盤の整備と可耕地となった「官有地」の分与が盛んに行われた。前世紀後半から今世紀の中葉にかけてフロンティアの開墾・入植に費やされた人々の時間と労力、形成される開拓社会は地理上の位置が異なっても共通性や普遍的性格をもつのではなかろうか。

下総における明治初期の開墾・入植の背景には、

明治政府による東京窮民に対する「棄民」政策が背景にあるとする考え方もある。国家の政策的措置と民衆の自発的流入・定住・流出が関係し合う下総地方の「人の移動」の歴史は、第2次大戦後も、引揚者への官および公有地の開放を基盤に再来した。戦後昭和史の一つの焦点となった成田空港問題も、下総のそのような近代史のながれの中で筆者は解釈した。ベトナム史においても、歴代の権力は、人口希薄なメコンデルタへ開発に必要な労働力を組織的に投入しようと何度も試みた。それは前近代の時代から1976年南北統一後の現代まで続き、そこに様々な問題性を産んできた。国家と住民の関係性は、地域の社会的特性に大きな影響を与える。

小論では、Iで房総の歴史的発展と明治期における下総台地の開拓、入植の歴史を辿り、IIではその開墾・入植を、メコンデルタ開拓史との比較を通して詳しく明らかにする。最後にIIIで開墾・入植過程に見られる当該地域の歴史固有性を考察する。

筆者は問題意識を形成するに当たって、本共同研究のメンバーとともに鎌ヶ谷市郷土資料館を訪問した。資料館の方々のお世話で江戸時代の馬牧の跡地を実際に見学することができたし、また下総台地の現地に出向いて、自然の地形やむらやま

ちの景観、畑土の色や集落・民家の様子などを観察することができた。明治期の欧化の香りを残す三里塚の御料牧場記念館では、成田の近代史に触れて、戦前入植の実態等を把握した。さらに戦後に入植した沖縄人集団の軌跡を知るために、当事者との面接調査に参加する機会を得た。これらは筆者にとって、本格的なこの地域の歴史理解を深めるために、有意義な調査となった。共同研究の代表者となって頂いた神田教授と共同研究を発案した村川助教授、および支援を頂いた大学関係各位に感謝の意を表したい。

I. 千葉県および下総地方の開拓

(1) 房総の風土と歴史

千葉県の母体を形作った房総の歴史は、古代以前に遡る。各地に豊かな貝塚、古墳の跡が点在している。海の時代に水上交通の要衝に位置した香取大社は、日本武尊の東征の伝説によって「いづさがみ（軍神）」としての信仰を今に残す。今の利根川下流域は、その時代は安是海（あぜの海）と呼ばれる内海であって、香取社は海岸沿いの河川の入り江に位置したという。黒潮にのって紀伊半島から人々が移住した証左であろう、安房の国には白浜、勝浦の地名が残る。海流を操って人やものや文化が運ばれ、海に結ばれた房総の世界は時空を超えて想像力をかき立てる。

大和朝廷が成立して古代国家の態様が整えられると、房総は総国（ふさのくに）を命名されたが、半島の南と北で政治支配の違いも生じたとされる。後に南（上総）の伊弉（勝浦市周辺）では、5世紀から6世紀前半ころから中央の干渉を受けて直

轄領とされたのに対して、北の在地豪族たちの支配は独立性を維持する傾向が強かったらしい [小笠原 & 川村：1994, 26-7]。

大化の改新以後、古代国家は当該地域を上総（かずさ）国と下総（しもうさ）国に2分し、646年に両国にそれぞれ国司と軍司を置いた。その後718年には、加えて安房国が誕生し、741年に一旦は上総に合併されるが、757年には再び復活して上総、下総、安房の三国に分かれた。中央集権の律令国家はこれら房総三国を再編し、それぞれ館山、市原、市川付近に国府を開庁した。また房総は古代政権の蝦夷地に対する軍事兵站基地とされたことから、軍団派遣や俘虜の受け入れの歴史も語られる [同上：45]。

中世前期以降は下総の千葉氏一族、南総には戦国大名として里見氏が名を馳せた。12世紀千葉氏の地盤は、現在の茨城県東葛飾東北の利根川沿岸で手賀沼を含む地域という。常胤の時に源頼朝を助け、武勲を得た。千葉氏は下総国の守護となり、子孫が守護を世襲したので、一門は北総に勢力をふるった [同上書：64]。地方豪族の里見氏は小田原城を本拠として勢威をふるった後北条氏と東京湾を隔てて対峙し、水軍を擁した。房総の豊かな水産業の産物、また九十九里の浜で産した塩舟をはじめとする交通税の徴収や東京湾を舞台に生きる海賊衆の物語は、当時の海上交易の隆盛を伝えるものである。

やがて江戸時代に入ると、上総に新しい定期市が開設され、利根川流域に河岸が造られる。江戸の台所として房総には農民的商品経済が発展したのである。材木や薪炭類を積み出す木下（きおろし）河岸や、銚子沖の海産物、醤油、酒、九十九里の鰯などを江戸の一大市場に向ける河川運輸が

大いに発達した。一方、江戸湾交通の要として木更津の発展も看過できない。

利根川を通して江戸との交流が深かった佐原では学問が発達し、平田篤胤らの下総国学や伊能忠敬の業績を産みだした。房総で最大の石高を誇った佐倉藩には、儒学・武術・兵学・医学・蘭学などの進取の気性に富んだ藩学、また順天堂洋学の発達も著しかった。周辺の成田にも庶民の文化興隆がある。成田不動尊信仰に支えられた「江戸市民の成田詣で」の定着、その縁日の人寄せ興業から発した歌舞伎などが有名だ。

房総の風土は、このように海や川を通して外界と繋がっていく豊かな関係性なしには語れない¹⁾。明治以前の房総の歴史的展開を規定した条件として、半島内部の自然以上に、半島を取り巻く海域世界や利根川の役割が重要であったように思われる。江戸や東京の存在に規定されることを強調しすぎれば、そのような中心に対して、房総が「周辺」として、あるいは「遅れた」世界としてイメージされがちである。太平洋に突き出た房総半島は、海の道で結ばれた外界から諸文化の摂取を盛んに行い、独自の役割や個性を発揮しながら発展を続けたのである。

(2) 千葉県の誕生と明治政府の下総台地開墾事業

明治元年に政府が全国の府・藩・県の制度を定めた時、房総には旧領主の3国16藩と移封された7藩、および旧幕府領が存在した。次いで明治4年の廃藩置県で、木更津県と印旛県および新治県に再編された。新治県は利根川右岸下流域の香取、その南の海上、匝瑳に加えて現茨城側の左岸流域

を含み、また印旛県北部には現茨城県および埼玉県に属する地域も含んだ。利根川を挟んで、両岸流域がそれぞれ生活圏として共有された現実に基づくものと思われる。しかし最終的には明治8年に、先の3県を整理統合して千葉県が誕生した。その際には、利根川は流域の人々の日常生活圏の中心ではなくなり、地方行政を確立する際の両県分離の県境そのものとなってしまった。

人々のつながりや生活実態が考慮されずに、海、川、山地部の尾根などが近代国家の国境とされた例は多い。それらは国内においても地方行政の領域枠(県・州境)となることがある。それはつまるところ、住民の意思に対峙する、あるいは調停者としての公権力の強さの結果なのであろう。公的権力は境界を定めるための「合理的」かつ「安易な」方策を選択しやすい。メコンデルタにおいても、1879年から1881年にかけてフランス植民地政庁がデルタ(現ベトナム領)を20省に分割して各地方行政府を置いたとき、メコン川流域は両岸を含んで同一の省とされた例が多かった。川は人々の生活の中心にあって、人・もの・情報等をもたらす不可欠の場であったからだ。しかし独立後の1955年にベトナム共和国政府が定めたメコンデルタの行政地図では、メコン川およびその支流を省境とし、流域はそれぞれの省都に行政上、別々に結びつけられた。

ところで、明治政府の地方統治機構の樹立と平行して、房総半島の内陸部では、新しい歴史の転機が訪れた。誕生した千葉県の農業には、耕地・農業者・技術など近世以来の伝統の上に継続した部分があるとともに、新たな開発や企業者によって従来とは異なる生産関係、移住形態が導入された。端的に述べれば、それは明治政府による下総

台地の開墾事業を契機としている [千葉県歴史 : 1997, 967-8]。

下総台地は、律令時代から武家時代に軍馬の放養地および供給地として開発された [川村他 : 1994, 195-6]。そして江戸時代の慶長年間に、幕府は下総の小金牧・佐倉牧、安房の嶺岡牧とよばれる幕府直轄の広大な放牧地を開墾した。台地一帯は、牧以外にも山林や原野が広がり、一般人の居住は禁じられていた。年代が下るにつれて周辺部は開発されたもの²⁾、牧野は幕府の管理下にあった。明治期の開拓地といえば北海道が有名で、下総台地の史実は十分に知られているとは言い難い。未開の原野が広がる下総台地は、江戸幕府から明治政府に引き継がれ、取香牧、小間子牧を除

き、明治政府の殖産興業政策の一大試験場、開拓のフロンティアとなった³⁾。

開拓に実際に携わる人々(労働力)は、政府が「東京窮民救済」事業の一環として斡旋し、原野に投入した。維新の政変で東京府下には下級武士、武家屋敷の奉公人、また武士階級に依存していた人々が、失業に苦しんでいた。農村からの流入者も増大し、社会不安を醸成していた。明治2年に、東京窮民を下総の小金原に移住させ、開墾に使役せよとの太政官布達が出された⁴⁾。彼らの救済と荒蕪地の耕地化を計画して、政府は開墾事業に乗り出すのである⁵⁾。当時、開墾対象地として開放された小金・佐倉両牧の入植状況は以下の通りである。

小金・佐倉牧の規模 (明治5年)

	牧の名称	町反	戸数	人員	開墾村名
小金牧	高田台牧	578.7	78	280	十余二村
	上野牧	581.2	204	734	豊四季村
	中野牧	735.2	198	713	初富村
	同牧	417.4	127	457	五香六実村
	下野牧	246.5	55	198	二和村
	同牧	276.7	119	428	三咲村
	印西牧	111.5	42	151	十余一村
佐倉牧	内野牧	796.8	98	353	七栄村
	高野牧	651.7	123	443	十倉村
	柳沢/小間子両牧	4,272.6	414	1,490	八街村
	矢作牧	1,778.4	104	374	十余三村
	神田牧	404.1	31	112	九美上村
	合計	10,850.8	1,593	5,733	

[川村他 : 1994.198]

千葉県成田市三里塚周辺地域の社会的・文化的特性に関する実証的研究

小金牧のうち、高田台牧は柏市高田・松ガ崎・花野井・十余二・流山市駒木付近、上野牧は柏市街付近、中野牧は松戸市五香・鎌ヶ谷市・六実付近、下野牧は習志野原付近、印西牧は印西町十余一付近である。これら5牧の土堤は35里6町あまりに達した。他方の佐倉牧のうち、内野牧は富里村七栄・新木戸付近、高野牧は富里村高野・新井田新田付近、柳沢牧は八街町市街、小間子牧は八街町四木付近、矢作牧は多古町十余三・久賀付近、神田牧は栗源町岩部・上の台付近に位置した。

開墾局が設置されて入植者が集められると同時に、新政府は開墾資金の捻出を東京の豪商に呼びかけた。彼らに下総開墾会社を創設させ、出資金に応じて土地を分配し、集めた入植者を斡旋したのである。政府の呼びかけに応じたのは、三井八郎右衛門ほかで、彼らが編成した開墾会社に、政府は20万両を貸し出した。

一方、移住志願者は明治2年10月には1万人に達した。明治4年1月までに小金牧・佐倉牧で開墾された土地は7,400ha、移住民は小金牧3,823人、佐倉牧2,480人、合計6,303人となった。明治5年の表中の人員数は、これより570人の減少を示している。開墾会社は、早くも明治4年以降には事業の窮状を訴え、脱落者が始まったからである[川村他：1994,266-268]。

移住がはじめに行われたのは、小金牧のなかの中野牧であり、初富村（鎌ヶ谷市）と命名された⁶⁾。それぞれの村の移住の順序に従って、数字と美称を組み合わせた地名が決められた。すなわち明治5年には、これに続いて二和村（船橋市）、三咲村（船橋市）、豊四季村（柏市）、五香六実村（松戸市）、七栄村（印旛郡富里村）、八街村（印旛郡八街町）、十倉村（印旛郡富里村）、十余一村（印

旛郡白井町）、十余二村（柏市）、十余三村（成田市）となった。久美上（佐原市）は当時新治県に含まれた。

このように新開地の開拓は、都市の資本に依存し、労働力および土地を政府が提供するかたちですすめられた。開墾会社の指揮下ですすんだ開拓の具体的有り様は、メコンデルタ開拓との比較の視点からⅡで論じることにする。

（3）三里塚と御料牧場

本共同研究の主要なテーマの一つである沖縄出身者の三里塚における入植・開拓史は、第2次世界大戦後、旧宮内庁所管の下総御料牧場の土地放出が契機となった。明治以降、官有地の分与と開墾農民の入植という形態で進んでいた下総台地の開拓は、敗戦による広大な旧軍用地の放出並びに旧御料牧場の解体・移転をもって、最終段階を迎えたといえる。

言うまでもなく、三里塚は戦後日本における一つの重要な政治闘争を引き起こした地域である。すなわち国家と住民間で長年に渡って争われた「成田空港建設問題」が発生した現場である。その三里塚を含む旧下総御料牧場は、明治21年に成立した。その経緯は、本誌上の神田・高澤論文が『下総御料牧場史』および『成田市史 近現代編』等に基づき明らかにしている。筆者は別の若干の文献を参照して、重複を避けながらこの点をさらに敷衍することにした。

前述のように、明治2年に下総台地の放牧地が開拓民に開放されたとき、放牧されていた馬は全部が取香牧（現成田市取香・三里塚・芝町岩山付近）に集められていた。馬疫の流行で取香牧の牧

馬が減少していたころ、政府は国際収支を圧迫する毛織物の輸入量を減少させるために、牧羊事業の育成に乗り出すことになった。牧羊場および牛馬の改良のための種畜用地に選定されたのが、取香牧と周辺の印旛郡十倉村(高野牧)・七栄村(内野牧)、下埴生郡十余三村(矢作牧)である。明治8年から10年にかけて、千葉県を介して2,902haの用地買収がすすめられた。取香牧は種畜場に、他の3村は下総牧羊場となった。牧羊場では明治9年から全国各府県から生徒を募って牧羊方法を教え、11年からは獣医学を講義、実習して、成果を挙げた。種畜場では種馬の導入による馬種の改良などが行われた[成田市史編纂委員会：1986年、77-80]。近代日本の畜産興業をめざし、この地で欧米からの技術導入がはかられた。

しかし、明治13年(1880)には取香の種畜場と下総牧羊場は合併され、下総種畜場となった。両牧場の経営不振を打開するための方策であった。下総種畜場は、両国区、山室区、猪ノ頭区(後に一部千葉県に払い下げ)、金堀区、獅獅穴区、駒之頭区、三里塚区の7区に分けられた。

内務省の下に置かれた下総牧羊場は、明治14年には農商務省に移管された後、さらに明治18年に宮内庁の所管に移されることになる。そして明治21年には宮内省下総御料牧場と改称されて、牧羊事務所は三里塚に移設された。事業の縮小と土地の移管によって結局、大正12年には牧場地は三里塚と両国の2区だけになって、敗戦を迎えたのである。

三里塚・大清水における一般人の集落は、先の取香種畜場の開設によって明治10年頃に形成され

ていた。三里塚地区の人々の生活は牧場とのつながりが深く、牧夫の居住のほか、牧場関係の諸産業が起こった。下総御料牧場を主な取引相手とする農具の製作・修理会社や、民間の牧場経営が出現したという[同上：81-85][成田市史編纂委員会：1983年、10-15]。

第2次世界大戦直後に、海外からの復員兵や引揚者、戦災の被害者であふれた国内の復興策として、緊急の開拓事業実施要領が閣議決定された。国を挙げての未耕地開墾事業であったため、県毎に目標面積が割り当てられた。旧軍用地が多く存在した千葉県では、戦前の買収問題が絡んで土地返還要求が起きるなど、事業は困難を極めたことは神田・高澤論文に詳しい。結局、千葉県の国有未耕地のうち開墾可能な土地として、旧軍用地では4,219町歩、および三里塚御料牧場では925町歩が解放された[千葉縣農地制度史 下巻：204]。当時の御料牧場は総面積1,444町歩3反6畝歩であり、解放地は財産税の引当として物納した農地を全面的に当てたものである[同上：219-10]。このほか元宮内省職員で組織された開拓組合員のために、農地121町歩も提供された[同上：210]。

この地に入植を希望した人々の申請を受けて、千葉県知事が、東京地方帝室林野庁に開拓計画を提出し承認通知を得るのは、昭和21年(1946)7月のことであった。旧御料牧場の解放をめぐる沖繩県人の動き、および彼らと地元民、戦災者同盟等との協議過程は、神田・高澤論文が明らかにしている。以下は、三里塚地域における戦後数年間の各組合の年度別入植状況を示す。⁸⁾

成田市の組合別入植状況、1949年12月31日現在

組 合 名	入植戸数（昭和年）						離農戸数（年）					1949. 12.31 現 在
	20	21	22	23	24	計	21	22	23	24	計	
駒ノ頭		35				35		3	1		4	31
古込		10				10						10
下総		61				61		13			13	48
天浪第1		11				11						11
三里塚第1		35				35						35
木ノ根第1		25				25						25
桜台		22				22						22
木ノ根第4		11				11						11
*葉山		43				43		1			1	42
*球陽		26				26						26
*双葉		11	33	8		52			2		2	50
宮下		96				96			3		3	96#
年度別の動き	0	386	33	8	0	427		17	6	0	23	404

注：96#は印刷ミスと思われる。合計は93として加算した。

史料：[千葉県農地制度史 下巻：221]

以上述べてきたように、房総の歴史は、前近代の時代において海域世界との密接な関係、また河川を利用した経済・文化圏の発展をみたが、明治期以降は、むしろ半島内陸部のとりわけ下総台地における入植・開拓の歴史へと大きな転換を示した。下総台地の幕府領であった牧場を明治政府は国有・官有地に編入し、過剰人口と社会不安を東京から一掃すべく、下総台地の荒野に向けた労働力の再配置＝開拓奨励策を講じた。明治初期の国家によるこのような文脈の中の開発政策は、次のⅡで論じるように様々な問題を産みながら、第2次世界大戦後に引き継がれる。旧軍用地を除けば、最後にのこされた御料牧場の土地放出が、地元民をはじめ、敗戦による海外からの引き上げ者、沖

縄出身者らをここに惹きつけた。次では国家と開拓農民の関係性を具体的な開拓形態に即して、メコンデルタの開拓事例と比較しながら考察するつもりである。（次号に続く）

注

- 1) 荒居英次は「房総地方史の問題点」と題した論文のなかで、「房総地方が一つの地方としての有機的なまとまりを持ちはじめたのは実際には明治以後の県政と鉄道発達などの結果ではあるまいか。」という問題提起をしている [地方史研究協議会：1973, 2]
- 2) 例えば江戸時代弘文元年に名主もしくは村役

- 人を請負人とした下総六方野の開発に関する研究は以下を参照 [松好：1936, 198-215]。
また [菊地：1958, 424-508] 参照。
- 3) 首都防衛の重要地域としての軍用地の増大については、[神田：1999] 参照。
- 4) 近代日本の草創期における都市窮民対策を批判的に扱った北原の論文を参照 [北原：1975]。
- 5) 従来、牧馬の払い下げによる利益や牧士の収入が失われることへの抗議が起きたのに対して、政府は「目前一家の小利に迷い御趣意に背く者は厳科に処す」という達しを出している [富里村史：1981, 681]
- 6) [天下井：1990] [同：1997] を参照。
- 7) 三里塚における沖縄移民の開拓については本誌神田論文を参照。共同研究テーマの意義は [村川：1998] を参照。
- 8) 神田・高澤論文中の『千葉県戦後開拓史』から引用の千葉県開拓農業協同組合の一覧表 (1974年段階) には見あたらない組合名には *印をつけた。
- 小笠原長和・川村 優『千葉県の歴史』
歴史シリーズ12、山川出版社、1994。
- 神田 文人「成田市内およびその周辺の開墾地と陸軍の『偵察録』」『環境情報研究』No. 7, 1999, 95～102ページ。
- 菊地 利夫『新田開発』上巻、古今書院、1958。
- 北原 糸子「明治初期窮民授産史：都市窮民対策の展開」『三井文庫論争』第9号、107～164ページ、1975。
- 千葉県編『千葉県史：明治編』統計印刷工業株式会社、1970 (再版)。
- 栗原東洋編『千葉縣農地制度史 下巻』
農地委員會千葉県協議會發行、1950。
- 富里村史編纂委員会『富里村史 通史編』
第一法規出版株式会社、1981。
- 成田市史編纂委員会『成田市史 近現代編』
第一法規出版株式会社、1986。
- 成田市史編纂委員会『成田市史近代編史料集五
産業・経済』第一法規出版株式会社、1983。
- 松好 貞夫『新田の研究』(第4章下総六方野の開
発及経営) 有斐閣、1936。
- 村川 庸子「千葉県成田市三里塚周辺地域の社会的・文化的特性に関する実証的研究：共同研究報告(1)(2)」『環境情報研究』
No. 6 (pp.193-199) 1998. No. 7 (pp.133-135),
1999。
- 千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史 資料編
近現代4 (産業・経済1)』県史シリーズ28、
1997。

引用文献

天下井 恵『下総牧の開墾：初富開墾のあけぼの』
第6回歴史講演会小冊子、船橋郷土資料館、
1990。
——「初富開墾人友七の生涯」『鎌ヶ谷市史
研究』第10号、鎌ヶ谷市教育委員会、
1997、2～36ページ。

ABSTRACT

A History of the Boso Peninsula and the Opening up the Shimousa Plateau : A Comparative View with the Clearing of the Mekong Delta (Part One)

Yoko TAKADA

This study is one part of a cooperative study entitled "Empirical Research on the Social and Cultural Characteristics of the surrounding areas of Sanrizuka, Narita-city, Chiba-prefecture." The writer focuses on the historical changes in the Boso peninsula of Chiba Prefecture brought by the reclamation policy of the Meiji Government that was carried on in Shimousa. This was a designed for unemployed samurais and the destitute of Tokyo to clear woodlands on the Simousa Plateau. The names of the hamlets that were founded by settlers still remain in north western Shimousa. The purpose of this study is to examine more closely the long-term historical development of the origins of settlement in the Sanrizuka area located in Shimousa after World War II. The writer will compare the process of the opening up of the Shimousa Plateau with the clearing of the Mekong Delta in the next issue.